【選評】
東京大学准教授
小川浩之

『一九八四年』だけではない 全体主義に対峙する「人間らしさ」の思想

ジョージ・オーウェル
「人間らしさ」への讃歌
川端康雄・著
岩波新書／2020年7月／880円+税

ジョージ・オーウェル（一九〇三～五〇）といえば、多くの人はまず『一九八四年』を思い浮かべるだろうか。人工知能（AI）やビッグデータを活用した新しい「統治」のあり方が進み、中国のような共産党一党支配下の国家だけでなく、欧米や日本などの民主主義国家でも、デジタル技術を駆使した市民への監視や個人情報収集の網が張りめぐらされる中で、非人間的な管理社会のディストピアを描いた『一九八四年』は、新たな予言の書として一九四九年の刊行から何度目かの注目を集めている。しかし長年オーウェルを研究し、全四巻の『新装版 オーウェル評論集』（平凡社）の編者を務めた川端氏は本書において、『一九八四年』にとどまらない、オーウェルの思想の広がりを紹介している。

自らの自由を破壊する暴君

例えば、オーウェルが一九三六年に発表した短編に「象を撃つ」がある。彼が若き日にイギリス帝国の警察官として五年間を過ごしたビルマ（現在のミャンマー）を舞台にしたこの作品は、次のような印象的な一文で始まる。

「南ビルマのモールメインでは、私はたくさんの人々に憎まれていた――たくさんの人々に憎まれるほど重要な存在となったことは、私の生涯でこの時

だけである」。

この短編の中で、町の分署の警官をしていた「私」は、すでにイギリスの帝国支配を圧政として批判する考えを持つようになっていたが、ある日、間接的に自らの「目を開くような出来事」を経験する。それは、「それ自体としてはたいした事件ではなかったけれども、その出来事のおかげで私は、帝国主義の本性――専制政府を動かしている真の動機――を、これまで以上にはっきりと見定めることができた」。

「私」は、暴れて家屋や市場を荒らし、インド人の苦力（クーリー）一人を殺した象を、すでに発作が治まって大人しくなっていたにもかかわらず、意に反して撃ち殺さざるをえないことになる。ライフルを持って象のいる場所に向かった「私」の背後に集まったビルマ人の群衆が、そうすることを強く期待していると感じ取ったからである。「この瞬間に、初めて、東洋における白人の支配のむなしさ、愚かしさがわかった。……この時私は悟った。白人が暴君と化すとき、彼は自らの自由を破壊するのだと。……なぜなら、白人が「土民たち」を感服させようと努めながら一生を費やすことこそ、白人支配の条件であり、それゆえ重大な場面ではつねに、白人は「土民たち」の期待に応えるようにふるまわねばならないからである」（以上の引用は、『新装版 オーウェル評論集1 象を撃つ』平凡社、二〇〇九年）。

「オーウェル的」の相対化

「オーウェル的」（オーウェリアン）という形容詞は『オックスフォード英語辞典』の最新版で、「ジョージ・オーウェルの著作、とくに彼が未来についてディストピア的に語った『一九八四年』（一九四九）で描かれた全体主義国家の特徴をもつ、あるいはそれを示唆する」と定義されている。しかし著者はその定義に満足せず、重要ではあるが、限定的なアイコンとしてのオーウェル像の相対化を果敢に試みる。それは、著者自身の言葉によれば、「『一九八四年』が強い影響を世界におよぼした著作であることを認めつつも、これを他と切り離して見るのではなく、彼の生涯の軌跡と著作全般を突きあわせて……その行動原理、思想がいかなるものであったかを立体的に浮かび上がらせる」ことを目指したものである（二六二～二六四頁）。

実際、「象を撃つ」は、オーウェルの「代表的な短編」として紹介され、「植民地支配の愚かしさと不毛さ、また支配者の尊大さの裏に潜む不安を「象を撃つ」エピソードによって鮮やかに描き出している」と評価される（九八～一〇一頁）。

オーウェルの人生には、彼の思想形

成にとって重要な転機となり、その作品にも直接的、間接的に影響を及ぼした、いくつかの大きな経験があった。そのひとつは、すでに見たようなビルマでの警察官としての勤務（一九二二～二七年）であり、他にも、出版社の依頼を受けて不況下で失業問題が深刻化していたイングランド北部に向かった調査旅行（一九三六年）や、フランコの反乱軍と戦うために共和国側の民兵部隊に参加したスペイン内戦での経験（一九三六～三七年）などを挙げることができる。それら三つの経験は、直接的には、それぞれに対応する『ビルマの日々』『ウィガン波止場への道』『カタロニア讃歌』という長編と、「絞首刑」「象を撃つ」「スペイン戦争回顧」などいくつかの短編や中編を生んだが、オーウェルの思想に与えた影響という意味では、それらの著作にとどまらない重要性がある。

本書で的確に指摘されるように、ビルマでの警察官としての勤務は、「植民地でのイギリス帝国の暴政への批判」の意識を生み（三五頁）、イングランド北部への調査旅行は、オーウェルに自身を社会主義者であると明言させる一方で、労働者たちとかけ離れた生活を送りつつ、社会主義は「歴史的必然」によって自ずと到来するという理論を振りかざす「知識層の大半が信奉する観念的な正統左翼」を厳しく批判させた（一〇三頁）。そしてスペイン内戦での経験は、「スターリンの独裁体制下のソ連共産党が、敵対するファシズム勢力と、装いは異なるが同質性を有する全体主義体制であることを……共産党による非スターリン主義系組織の弾圧、粛清の現場に立ち会うことで」察知させたのであった（一二七頁）。

オーウェルは一九四六年に発表した「なぜ書くか」というエッセイで、一九三六年以降、彼が真剣に書いた作品はすべて、「直接間接に全体主義に反対し、私が理解するところの民主的社会主義を擁護するために書いた」と述べた（一二九頁）。

興味深いことに、今年四月に九三歳で逝去したイギリス社会思想史研究者の都築忠七は、自ら翻訳した『カタロニア讃歌』の「訳者あとがき」で次のように記している。「オーウェルの場合、全体主義の反対物は個人主義ではなく、もちろん資本主義ではない。自由放任の自由でもない。それは人間らしさ（decency）であり、それが本書のテーマである普通の人間の魅力……人間の品位、人類の連帯感へとわれわれを連れもどす」（『カタロニア讃歌』岩波文庫、一九九二年）。この指摘は、本書の副題からも端的にうかがえるように、著者が本書で、オーウェルが「ふつうの人びと（コモン・ピープル）」が持つ

「人間らしさ（ディーセンシー）」への信や希望を抱き続けたことの意義を繰り返し強調していることと、まさに共鳴するものである。

現代への射程

現代においてオーウェルを読む意義は、『一九八四年』でディストピアとして描かれたような、人間性を喪失した監視・管理社会や事実の歪曲への警告だけにとどまるのではない。オーウェルが、ヒトラーやスターリンの全体主義だけでなく、イギリスの帝国主義や階級社会にも強く反対したとき、その基盤には、「ふつうの人びと」の生活や文化への共感と、彼らの尊厳が踏みにじられることへの怒りがあった。オーウェルに関する「オーウェル的」な理解を、こうした形で拡張することに同意するか否かは読者に委ねられるとしても、「ふつうの人びと」に着目して現代のさまざまな課題について考えることの重要性を否定する者は少ないだろう。

さらに、オーウェルの作品を読むことは、私たちを過度に抽象的、観念的な議論から解放する契機になりうる。

すでに見たように、オーウェルは自らを民主的社会主義者と位置づける一方で、「観念的な正統左翼」を激しく批判したが、冒頭で触れた「象を撃つ」での帝国主義批判も、その抑圧性のみに焦点を当てたのではなく、自身のビルマでの警察官としての実体験を踏まえて、支配する側の愚かさや虚しさに鋭く迫ったものとなっている。

「白人が暴君と化すとき、彼は自らの自由を破壊する」という一節は、植民地支配や人種差別の問題はもちろんだが、中国の急速な台頭が見られる国際政治や日本を含む各国の国内政治、さらにはより日常的な職場、学校、家庭などでの権力や支配をめぐる問題に関しても、今日、私たちにあらためて重い問いを突き付けているといえるのではないだろうか。●

カタロニア讃歌
ジョージ・オーウェル・著
都築忠七・訳
岩波文庫／1992年5月／920円+税